

# 竺道生・妙法蓮花經疏における信

望 月 海 淑

1

『妙法蓮花經疏』は竺道生の撰するところといわれる。道生は鳩摩羅什門下の中でも四哲の一人と称せられた人物であった。すなわち『高僧伝』は、道生は慧解入レ微玄構文外毎恐言舛<sup>レ</sup>となしており、『出三藏記集』の中では、この道生の別伝を記し、道生は彭城の人で

生幼而穎慧聰悟若神。其父知<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>凡器<sup>一</sup>。愛而異<sup>レ</sup>之。于時法太道人德業弘懿乃携以歸。依遂改<sup>レ</sup>服受學。既踐<sup>レ</sup>法門<sup>一</sup>俊思卓拔。披<sup>レ</sup>說經文<sup>一</sup>一覽能誦。研<sup>レ</sup>味句義<sup>一</sup>即自解說。……初住<sup>レ</sup>龍光寺<sup>一</sup>。下<sup>レ</sup>帷專業。隆安中移<sup>レ</sup>入廬山精舍<sup>一</sup>。幽棲七年以求<sup>レ</sup>其志<sup>一</sup>。常以爲<sup>レ</sup>入道之要<sup>一</sup>慧解爲<sup>レ</sup>本。故鑽<sup>レ</sup>仰群經<sup>一</sup>解<sup>レ</sup>酌雜論<sup>一</sup>。万里隨<sup>レ</sup>法不<sup>レ</sup>憚<sup>レ</sup>險遠<sup>一</sup>。遂与<sup>レ</sup>始興慧叡東安慧敞道場慧觀<sup>一</sup>。同往<sup>レ</sup>長安<sup>一</sup>從<sup>レ</sup>羅什<sup>一</sup>受學。<sup>1)</sup>

であったとなしている。幼少の時から優れていたため、釈道安の門下の竺法太の門人となり、後に龍光寺、廬山をへて長安で鳩摩羅什の門下に投じ、頭角をあらわしたことになるであろう。

かかる道生は、義熙五年（四〇九）建康に帰り、善不受報と頓悟義を説いて、『大涅槃經』を講じたが、この頃未だこの經典がこの地には伝わっていなかったために、諸師はこれを背經の邪説として容れず、かえって道生は排折せられて、廬山に移り、ここで『大涅槃經』を講じ

竺道生・妙法蓮花經疏における信（望月）

竺道生・妙法蓮花經疏における信（望月）

觀聽之衆莫不悟說<sup>②</sup>。法席將畢。

の時、端坐正容のままたちまちに机によつたまま卒したという。元嘉十一年（四三四）十月と伝えられる。しかし、『妙法蓮花經疏』はその冒頭において

余少預<sup>①</sup>講末。而偶好<sup>②</sup>玄□。俱<sup>③</sup>文義富博。事理兼邃。既識<sup>④</sup>非<sup>⑤</sup>芥石。難<sup>⑥</sup>可<sup>⑦</sup>永紀。聊於<sup>⑧</sup>講日。疏<sup>⑨</sup>錄所聞。述<sup>⑩</sup>記先言。其猶鼓<sup>⑪</sup>生。又以<sup>⑫</sup>元嘉九年春之三月。於<sup>⑬</sup>廬山東林精舍。又治<sup>⑭</sup>定之。加採<sup>⑮</sup>訪衆本<sup>⑯</sup>具成<sup>⑰</sup>一卷<sup>⑱</sup>。

となしているから、この書の撰述は道生が入寂する二年半ばかり前のことになる。してみると、鳩摩羅什の門下として訳場につらなつた道生は、その折の羅什の講ずるところを筆録しておき、晩年、廬山においてこれに他の人の筆録したものなども参照しながら、この書を撰述したということになると思われる。

『妙法蓮華經』は鳩摩羅什の訳出になることは言を待たないが、羅什の手になる注釈書が遺されていないので、羅什門下の手になる注釈書が求められるところである。その点、竺道生の『妙法蓮花經疏』は貴重なものといわなければならぬ。しかし、『高僧伝』は羅什門下の手になる注釈書として、曇影の『法華義疏』四卷、道融の『法華義疏』、慧観の『法華宗要』があつたことを記し、『法華文句』は、僧叡が法華經を講じて九轍の説を説いたことを記しているが、それらは名字或は序のみで原本は今に伝えられてはいない。

しかし、その『妙法蓮花經疏』は、善淨法輪、方便法輪、眞実法輪、無余法輪の四種法輪をもつて、釈尊一代の仏教を判釈して、更に

此經以<sup>①</sup>大乘<sup>②</sup>為<sup>③</sup>宗。大乘者。謂平等大慈。始<sup>④</sup>於<sup>⑤</sup>一善<sup>⑥</sup>。終乎極慧是也。平等者。謂理無<sup>⑦</sup>異趣<sup>⑧</sup>。同歸<sup>⑨</sup>一極<sup>⑩</sup>也。大慈者。就<sup>⑪</sup>終為<sup>⑫</sup>稱耳。若統<sup>⑬</sup>論始末<sup>⑭</sup>二者。一豪之善皆是也。<sup>⑮</sup>

として、法華經は大乗であり、常住の妙旨、平等大慧のものであることを示している。塩田義遜博士によると、この四種法輪の教判は、竜樹の大小二教判を法華の文に依て四種に分つたもので、法華一經中心に組織せられたる教判である<sup>(5)</sup>といふことである。

また『妙法蓮花經疏』は法華經一經を三段にわかつ一經三段を展開している。それによると

第一段は序品から安樂行品までの十三品で、三因を明し一因となしたもの

第二段は從地誦出品から屬累品までの八品で、三果を弁えたもの

第三段は藥王菩薩本事品から普賢菩薩勸發品までの六品で、三人に均して一人となしたもの<sup>(6)</sup>

である。すなわち、法華經を因・果・人の三段にわかつて、蕩其封異之情、泯其分流之滯したもので、大乘一実に歸一することであることを示すとともに、蛇足ながら、この時の法華經が二十七品本であることをも示している。尚、この一經三段に関しては、この書の内容において詳説がなされているが、これによって図示したものが塩田博士の著書に見られる。<sup>(7)</sup>

〔註〕

- (1) 大正・五五・一一〇下
- (2) 同・同・一一一上
- (3) 正統・二・三九六左下
- (4) 同・二九六下・七上
- (5) 塩田義遜・『法華教学史の研究』一一七～一二〇
- (6) 正統・二・三九七右上

竺道生・妙法蓮花經疏における信(望月)

竺道生・妙法蓮花經疏における信(望月)

(7) 塩田義遜・『法華教学史の研究』一二四〜五

尚、道生に關しては、横超慧日『法華思想の研究』一一一〜一二三〇に詳しい論説がある。

2

『妙法蓮花經疏』(『法花經疏』)は法華經の序品の冒頭の言葉である「与大比丘衆<sup>(1)</sup>」を釈して

若聞而独。由亦難<sub>レ</sub>信。縱使我等及凡。未<sub>レ</sub>勉於独。明<sub>レ</sub>共聞之人<sub>レ</sub>。皆是我上。举以証<sub>レ</sub>經。比丘者。破惡之通称也。所以先烈<sub>レ</sub>声聞後菩薩<sub>レ</sub>者。斯則内外之異。内則有<sub>レ</sub>局。外無<sub>レ</sub>方。故宜爾也。亦表<sub>レ</sub>弘化<sup>(2)</sup>。

となしている。これはどのようなことなのか。同疏は「如是我聞」の我聞についてふれた中で、將<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>伝<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>未聞<sub>レ</sub>。若有<sub>レ</sub>言而不<sub>レ</sub>伝。便是從<sub>レ</sub>説。不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>能説……となしている。すなわち、釈尊の説示を聞いたということは未聞のものにそれを伝えようとするものにならなければならず、そこでは我を廢し聞に従い、聞は釈尊より来たり已心に非ざるを明出する、もの<sup>(3)</sup>でなければならぬ、ということになるであろう。してみると釈尊の言葉を知くとすることは、素直でひたすらにそれを受け入れる心がなければならぬことを意味し、同時に、それを他の人に伝えるという働きかけがなければならぬことを意味している。

聞法の方にそのような意味あいがあるならば、釈尊が教えを説くことの方にもそのようなものがなければならぬ。法華經はその対告衆として大比丘衆を挙げ、菩薩を上げ、バラモンの神々から神話上の神々、阿闍世王 Ajatasatru までもが集まっていたことを示しているが、これこそ一人のためにのみ説かれたものでないことを示したものであり

それ故にこそ信すべきものであることを暗示している。聞而独由亦難信といわれる所以と思われる。してみると、ここで語り出される難信の信は梵語の *śraddhā* にあたるものであろう。

ついで『法花經疏』は序品に関する注釈として、此土・他土の六瑞に関し、文殊師利 *Mañjuśrī* が弥勒 *Maitreya* に語った「如我惟忖」の言葉の中に信への言及をしている。

すなわち、文殊師利が如我惟忖と語ったのは、玄理幽淵で自非証窮深理であるからとして

於文殊尚惟忖者。明三了在在。蓋教三信情也。

としているのがそれである。ここでは文殊師利が過去の諸仏の古事によって、今、釈尊が法華經を説くだろうと推測するのであるが、この推測が単なる憶測でないことは法華經が説示しているところであり、これをうけて『法花經疏』は、明了必在仏とし、情を教信するとなしたのであろう。してみるとここでの信は明了必在仏にかかわるものであるから、それもまた *śraddhā* にあたる信といえるであらう。

方便品は諸仏の智慧は甚深無量、難解難入で、一切の声聞辟支仏の知ることあたわざる所であることをのべ、その理由を説明して、仏は過去に無數の諸仏に親近し、道法を行じ勇猛精進し、名称普聞で甚深未曾有の法を成就し隨宜の所説であるからだとしている。これについて『法花經疏』は、三乗は皆權にして大乘は乖かず、大なるゆえんなりとし、故に所不能知とはいわず、二乗は正しく大致に反するから不知と言うのだとして

所以者何至未曾有法。若不明所以。豈能信之。必須重積積行。如レ此。所得造極。為未曾有。可レ非量者。合智慧句。此以因釈果。

と注釈している。すなわち意趣難解の法華經の教えは、信することによって開かれて来るものであることを示してい

る。

しかして、十如是に続いて語られる釈尊の偈の中の「除諸菩薩衆信力堅固者」の句に關しては

仏昔説<sup>レ</sup>三而今言<sup>レ</sup>無又未道<sup>一</sup>。此意難<sup>レ</sup>測。測<sup>レ</sup>之者寡。故広列<sup>レ</sup>諸人<sup>一</sup>。堅固者八住以上。唯其能測<sup>レ</sup>仏當<sup>レ</sup>説<sup>一</sup>一乘<sup>一</sup>。故云<sup>レ</sup>除也。二乘居然不<sup>レ</sup>測。新發意菩薩。性解之徒。不退菩薩。初住至<sup>レ</sup>七住<sup>一</sup>。豈曰不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>高美一乘<sup>一</sup>。使<sup>レ</sup>人崇信。故云<sup>レ</sup>爾耳。<sup>(8)</sup>

とのべている。これはこの法は解し難しとするのをうけたもので、八住以上のものは信力堅固だから釈尊による法華經の一乗を理解することが出来るのだとしている。ここでの除諸菩薩衆信力堅固者は、梵文法華經では

anyatra bodhisattvabhya adhimuktīya ye śhitāḥ<sup>(9)</sup>

の訳であるから、信力と訳されたものは adhimukti である。『法花經疏』の使人崇信の信は、法華經の「於仏所説法當生大信力」をうけたものと思われ、梵文法華經はこの信力を生ぜよを、 adhimukti-saṅgama bhāvāhi となしているから<sup>(10)</sup>、この場合も adhimukti の語にあたるものと思われる。すなわち信力堅固者は能得解たとする法華經の説示の展開を考えると、ここでの信はひたすら信ぜよとの意ではなくて、釈尊の教えをしかと把握し信解し待た境地を確立することで、解に通ずる意もあることを示しているから、 adhimukti がふさわしいかと思われる。

しかして更に五千起去に關連して、この五千人の退去を示すは、真偽の別をあきらかにするためであり、ここでの真偽は自ら判じうることだとして

若増上慢人。不<sup>レ</sup>預<sup>レ</sup>嘉會<sup>一</sup>者。時情慶至。自鞭信悟矣。<sup>(11)</sup>

となしている。鞭の文字には、かたいという意があるところからすると、鞭信悟は一心に信悟することを意味してい

る。そして『法花經疏』がこの前において、舍利弗すでに慇懃に三請す、それ聖人が教を設くるに言は必ず漸あり、悟は亦諧あり、としてゐることからして、この信悟は信と悟という二つの事柄をあらわしている。法華經は舍利弗が釈尊にむかつて敬信 *śraddhā* しますとの言葉を、三度語つた後においてこの部分に關することを語り出すとの展開を示しているので、道生によって示される信悟の信は *śraddhā* であると思われる。<sup>(12)</sup>

しかして、五濁の惡世に關して、仏は自ら三教(乘)を設けようとするのではなく、衆生が穢濁により一悟しがたいたために三乘を説いたのだとして

於三(一)佛乘。分別説三(二)。佛以濁世人無大志。而所(三)以佛理幽遠。不能信之。抑(四)使近人。作三乘教耳。<sup>(13)</sup>  
し、更に、三を説くといえども恒に是れ一を説く、一人の身に於て仏を得る、豈近人を抑使せず、とのべている。すなわち濁世の人たちには大志がない上に佛理は幽遠なので信することが出来ないので分別説三しただけで、実は恒に一乘を説くのだとしているもので、ここでの信はそのような理を信することが出来ないとの意で使われている。妙法華經はこのところを

自謂阿羅漢辟支仏一者。不聞不知諸佛如来但教化菩薩一事。此非佛弟子。非阿羅漢。非辟支仏。<sup>(14)</sup>  
とし、梵文法華經は

ye śrāvakā arhantaḥ pratyekabuddhā vēmān kriyān tathāgatasya buddha-yāna-samādapanānān na  
śrīvanti nāvataranti nāvabudhyanti na te Śāriputra tathāgatasya śrāvakā veditavyā nāpy arhanto  
nāpi pratyekabuddhā veditavyān<sup>(15)</sup>

(声聞・阿羅漢・辟支仏たちで、ブツダの乗物を示す如来の行いを聞かず、理解せず、覺らないものがある、舍利

竺道生・妙法蓮花經疏における信(望月)

弗よ、彼等は如来の声聞ではないと知るべきで、阿羅漢でもなく、辟支仏でもないとするべきである。）

となして、聞かず理解せず悟らないと表現されている。すなわち『法花經疏』が示している不能信之の信にあてはまるものは見られない。しかし、このすぐ後において妙法華經は阿羅漢のもので若不<sub>レ</sub>信<sub>三</sub>此法<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>是<sub>レ</sub>処<sub>一</sub>とのべ、梵文法華經は *imam dharmam srutva na śraddhadyat śhāpavivā* (16) の法門を聞いて信じない) として信 *śradhā* がつかわれている。この展開で知られることは、釈尊の教えは信すべきものであると信を強張していることであるが、逆に濁世の人にとっては信を強張しなければならぬ程に信じにくいものなのであろう。そこで、妙法華經の除<sub>三</sub>仏滅度後現前無<sub>レ</sub>仏の句について道生は

二聖之間。既無<sub>三</sub>聖主<sub>一</sub>。容可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>信。若<sub>レ</sub>仏在者。必信無<sub>レ</sub>疑。密牽時人。及<sub>レ</sub>仏現在。何可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>信。(17)

とのべて、信が仏に相對するものであることを示している。仏に對する信、それは *śradhā* としての信であらう。

譬喩品は釈尊が舍利弗にむかつて、我今還欲<sub>レ</sub>令<sub>三</sub>汝憶<sub>三</sub>念本願所行道<sub>一</sub>故。為<sub>三</sub>諸声聞說<sub>三</sub>是大乘經。名<sub>三</sub>妙法蓮華教菩薩法<sub>一</sub>所護念<sub>(18)</sub>。と語って、更に唯一<sub>レ</sub>仏乘無<sub>二</sub>亦無<sub>三</sub>の義を示さんとして三車火宅の喩を語っているが、等一の<sub>レ</sub>大車を与えたことについて、『法花經疏』は次のように語っている。

各賜<sub>三</sub>諸子等一大車<sub>一</sub>。由<sub>レ</sub>索<sub>レ</sub>得說<sub>三</sub>是一理<sub>一</sub>。理苟無<sub>レ</sub>三。今与<sub>三</sub>其一<sub>一</sub>。一是未<sub>レ</sub>知為<sub>レ</sub>与。非<sub>三</sub>始与<sub>一</sub>也。本已解無。豈更<sub>レ</sub>說哉。託<sub>三</sub>以<sub>レ</sub>悟諸不達<sub>一</sub>耳。所以託<sub>レ</sub>之。良由<sub>三</sub>人情<sub>一</sub>信<sub>レ</sub>我。(19)

この等一の大車（大白牛車）について道生は、衆宝で莊嚴されているのは大乘の妙理の秀れたさまを表すのだとして衆宝は八万四千波羅密を、欄楯は陀羅尼を、懸鈴は四弁を、轆蓋は慈悲を喩えたものだとしている。これによってみると、等一の大車は釈尊によって与えられる最高のもので唯一無二のものであることになる。そこで、理苟無<sub>レ</sub>三と

稱し、由三人情二信<sup>レ</sup>我となされたものと思われる。すなわち一仏乗が説かれた上は、それを説示した釈尊を信じその中にひたすらに入りこむ以外に道はないのであろう。法華経はこのところを、

tatra Śāriputra ye satvāḥ paṇḍita-jāṭiyā bhavanti te tathāgatasya loka-pitṛ abhiśraddadhanti |  
abhiśraddadhivā ca…… (28)

(その時、舍利弗よ、かの衆生たちの賢い人々は世間の父である如来を信じる、信じて……)

としていることからしても、ここでの信は *śraddhā* の信が適当と思われる。

この等一の大車を与えると語った後で、譬喩品は今此三界皆是我有の思想を語るが、そこにあたる偈の中の汝等若能 信受是語<sup>(29)</sup>について『法花経疏』は

夫唱<sup>レ</sup>高必知寡。理深必信少。前明<sup>ニ</sup>一乘之道<sup>一</sup>。則旨<sup>ニ</sup>玄致邈<sup>一</sup>。冥然絶朕。近識之徒。取<sup>レ</sup>信良難。自下。明<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>妄為<sup>レ</sup>人説<sup>一</sup>。厲言<sup>レ</sup>薦席。向方之徒。安得<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>鞭信<sup>ニ</sup>悟之<sup>一</sup>矣<sup>(30)</sup>。

としている。この汝等若能 信受是語に対する梵文法華経は

vadamī ekam imu buddha-yānam pariśraddhā sarvī jīnā bhaviṣyatha (31)

(私は唯一の仏乗を語る、保持し、一切の勝者となれ)

となっており、妙法華経よりは積極的であるが、信に関する言及はなされてはいない。羅什の訳出に使用した梵本がもしも現行の梵本と同一の表現であるとするならば、羅什は *pariśraddhā* を信受と訳出したことになるであろう。

すなわち、ここでの信受は *śraddhā* ではないが、仏乗を保持するためには、仏乗を信ずるといふ心がなければならぬので、かく訳出したものと思われる。しかして道生はこの信受について、理深必信少とし、近識之徒取信良難と

竺道生・妙法蓮花経疏における信(望月)

して、仏の眞実の言葉・一仏乗は信じにくいとしているが、このようなものこそ *śraddhā* のもつ信の意かと思われる。

3

信解品は一仏乗の説示を聞いた四大声聞らが、それを領解して喜びの心を表白し、長者窮子の喩を語っているが、『法花經疏』は、これについて

四大声聞。雖因<sub>レ</sub>譬得<sub>レ</sub>悟。悟既在<sub>レ</sub>後。迹以<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>審。故自説<sub>三</sub>窮子<sub>一</sub>。以表<sub>三</sub>其解<sub>一</sub>。解必是審。謂之信解。亦因<sub>レ</sub>妓重明<sub>三</sub>先三後一<sub>一</sub>之道<sub>一</sub>。<sup>(24)</sup>

と語っている。すなわち、長者窮子の喩は四大声聞の会得した解を表わすもので、解は審であり信解であり、それは一仏乗の何たるかを明かすものでもあるとなしている。ここでの表其解の一句の解は理解と思われ易いところであるが、次に解必是審の一句があるから、解は単なる理解ではあり得ない。謂之信解といわれるゆえんと思われる。信解品は梵文法華經によると *adhimukti parivartan* と表現せられているから、ここでの解は正しく信解 *adhimukti* を意味するはずである。一仏乗の説示を聞き歡喜を生じ、到達し得た心の境地、それが信解と表現されたものであろう。

しかして長者窮子の喩の中で、窮子が長者を見た時のことを法華經は示している。獅子座におる父は婆羅門等にとりまかれ、眞珠の嬰路で身を飾り、吏民・僮僕は白払をもって左右に侍立していたとされるところを注釈して、『法花經疏』は、長者は理為法身であるから無畏であり、無為にあるから宝机におり、橋傲の婆羅門らは伏しているのだとし、形が無非法であるから法宝でもって莊嚴せられているのだとして、吏民・僮僕らが手に白払を持ち左右に侍立

しているのを

奉<sub>二</sub>教信<sub>一</sub>手。執<sub>二</sub>無漏慧<sub>一</sub>。義為<sub>レ</sub>侍<sub>三</sub>立左右<sub>一</sub>。私塵器也。<sup>(25)</sup>

だとしている。白払は無漏慧の払だとするから、白払を手にする人によって侍されている人は仏のことを暗示するであろう。したがって奉教信なる言葉は仏に対するものでなければならぬ。しからば奉教信によって示される信は、仏を信するもの *Sraddha* の意であると思われる。

薬草喻品の注釈において『法花経疏』は

四大声聞。既悟<sub>二</sub>於初譬<sub>一</sub>。次自説<sub>二</sub>信解<sub>一</sub>。以表<sub>レ</sub>悟。悟必是審。深領<sub>三</sub>聖説先三後一之意<sub>一</sub>。<sup>(26)</sup>

と冒頭に述べているが、信解品に説かれる四大声聞の言葉は仏の一仏乗の説示を彼等が領解したものであることを示したものであるから、ここでの信解とはその領解のことを意味しているであろう。そしてその領解は信解 *adhimukti* で表現せられているから、<sup>(27)</sup>ここでいう信解も当然 *adhimukti* であろう。しかして『法花経疏』は悟を表わし深く先三後一の意を領すとしているから、*adhimukti* は単に信ずるということではなくて、一仏乗の意を領解した上にあるものなることを示していると思われる。すなわちここでの信解は、仏の教え、正しいものに対してのものであることに意義が存する。如来観<sub>二</sub>知一切諸法<sub>一</sub>至<sub>二</sub>一切智地<sub>一</sub>。<sup>(28)</sup>といわれるゆえんもそこに存するであろう。

4

法師品の已今当の三説に関して『法花経疏』は

已説今説。上章以<sub>レ</sub>人明<sub>レ</sub>法。自下以<sub>レ</sub>法明<sub>レ</sub>人也。以<sub>二</sub>法難<sub>レ</sub>得。受持人難<sub>レ</sub>得。受持人難<sub>レ</sub>得者。亦以<sub>二</sub>法難<sub>三</sub>信解<sub>一</sub>故

竺道生・妙法蓮花経疏における信(望月)

(8)

となして、これからは法華經を受持する人が誰であるかを明らかにするところであり、受持する人が得難いのは法を信解することが難しいからだとなっている。ここでの信解がどのようなものであるかについては、妙法華經が

已說今說當說。而於<sup>二</sup>其中<sup>一</sup>。此法華經最為<sup>二</sup>難信難解<sup>一</sup>。……從<sup>レ</sup>昔已來未<sup>レ</sup>曾顯說<sup>一</sup>。而此經者。如來現在猶多<sup>二</sup>怨嫉<sup>一</sup>。

としているから、難信難解にかかわることかと思われるが、しかし、梵文法華經は

bahavo hi mayā Bhaiṣajyarāja dharmaparyāyā bhāṣitā bhāṣāmi bhāṣīye ca | sarveṣāṃ ca teṣāṃ

Bhaiṣajyarāja dharmaparyāyānām ayam eva dharmaparyāyaḥ sarva-loka-vipratyanikāḥ sarva-lokāstra-ddadhanīyaḥ | …… tathāgata-bala-samrakṣitam apratibhina-pūrvam anācakṣita-pūrvam anākhyaṭam

idam sthānam | bahu-jāna-pratikṣipto 'yaṃ Bhaiṣajyarāja dharmaparyāyas tīrṇhato 'pi tathāgatasya

(薬王よ、私によって実に沢山の法門が語られ、語り、語るであらう。薬王よ、これら一切の法門の中で、この法門は一切の喜ばないところで、一切の世間の信じないところである。……この立場は如来の力で守護され、以前から壊されず、以前から顯われず、示されたこともない。薬王よこの法門は如来のおる時でも沢山人々に拒否されていた)

とのべているから、妙法華經の難信難解にあたるものは、世間が喜ばず信じないところとであり、それは a-śraddhā を訳出したものといえるであらう。してみると『法花經疏』の法難信解の信解にあてはまるものは、adhimukti ではないであらう。

又、『法花經疏』は

於<sub>二</sub>彼高原穿鑿<sub>一</sub>求<sub>レ</sub>之。一乘比<sub>三</sub>乘<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>難信<sub>一</sub>。於<sub>三</sub>法花<sub>一</sub>求<sub>レ</sub>解。如<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>於<sub>三</sub>高原<sub>一</sub>。受持說誦。為<sub>三</sub>穿鑿<sub>一</sub>也。<sup>(32)</sup>

として、難信を語っているが、妙法華經と梵文法華經はそれぞれ是經難<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>聞 信受者亦難<sup>(33)</sup>

durlabho vai śravo hy asya adhimukti pi durlabhā<sup>(34)</sup>

(実にそれを聞くことは難く、信解することも難い)

と、偈の冒頭で語り、高原に水を求めることを述べているから、法華經と『法花經疏』との表現は同一の箇所について同様の意を伝え、しかも難信といわれた信は信解 adhimukti であることを示している。

すなわち『法花經疏』が信解となしたところは śradhā で、信となしたところは adhimukti であることとなるであらう。

見宝塔品に關して、多宝塔の出現の理由をのべて『法花經疏』は

所<sub>二</sub>以現<sub>レ</sub>塔者証<sub>レ</sub>法華<sub>一</sub>。理必明<sub>レ</sub>也。一以<sub>レ</sub>塔証。二以<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>出<sub>レ</sub>声<sub>一</sub>証。物因<sub>三</sub>事<sub>一</sub>。信弥深<sub>レ</sub>至。亦遠表<sub>三</sub>極果<sub>一</sub>。微現<sub>三</sub>常住<sub>一</sub>也。<sup>(35)</sup>

と、多宝塔の出現により信が深くなり、遠くは極果を、微には常住を示すのだとし、更に多宝塔が空中に住在するの

は 夫人情味理。不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>以<sub>三</sub>神奇<sub>一</sub>致<sub>レ</sub>信。欲<sub>二</sub>因<sub>レ</sub>效<sub>レ</sub>顯<sub>レ</sub>証<sub>一</sub>。故現<sub>三</sub>宝塔<sub>一</sub>。<sup>(36)</sup>

だとしているが、梵文法華經は、多宝塔が涌出した時、四衆等が体得した心の状態について

竺道生・妙法蓮花經疏における信(望月)

竺道生・妙法蓮花經疏における信（望月）

sanjāya-harsāh prīti-prāmodya-prasāda-prāptāh<sup>(35)</sup>

（歡喜を生じ、喜びと喜悅と淨信を得た）

としている。すなわち『法花經疏』が以神奇致信せざる能ずとした信は、喜び喜悅し淨信を得たにかかわるものと思われる。尚、妙法華經はこの梵文法華經に対して「皆得法喜怪未曾有。從座而起恭敬合掌<sup>(36)</sup>」としているにすぎないから、果して『法花經疏』が prasāda をとらえて注釈したのかどうかは明白ではない。更に、多宝塔が衆宝で莊嚴せられてゐることについて

遠表<sup>(37)</sup>極果。無善而不<sup>(38)</sup>有。於是其理。從<sup>(39)</sup>事顯然。雖<sup>(40)</sup>難<sup>(41)</sup>不<sup>(42)</sup>信。其可<sup>(43)</sup>得乎。

とし、更に

今釈迦是真。真仏所説。説<sup>(44)</sup>必明<sup>(45)</sup>一<sup>(46)</sup>当<sup>(47)</sup>。於<sup>(48)</sup>是群情信悟<sup>(49)</sup>一<sup>(50)</sup>彌<sup>(51)</sup>篤<sup>(52)</sup>。

として、塔中証明の声により釈尊は真仏で、その所説も真なるものであるから信しないわけにはいかないのだ、としている。これらは意をとったものであるから、これらの箇所について梵文法華經と対比することは出来ないが、ここでの信は真そのもの、真の仏に対するものであることを示している。仏・真理等の絶対なものを信するという時の信は、śradhā を語る時に使われている場合が多いが、adhimukti の時にもこのように語られるので即断は出来ない。

5

分別功德品についての疏の中では、その冒頭に

夫因果相召。信若影響。上既聞<sup>(53)</sup>壽命之説。則<sup>(54)</sup>尽<sup>(55)</sup>心求<sup>(56)</sup>益。藉<sup>(57)</sup>茲<sup>(58)</sup>尅<sup>(59)</sup>果。其<sup>(60)</sup>報<sup>(61)</sup>彌<sup>(62)</sup>矣。今<sup>(63)</sup>并<sup>(64)</sup>其<sup>(65)</sup>參<sup>(66)</sup>差<sup>(67)</sup>。故<sup>(68)</sup>謂<sup>(69)</sup>分別功德

品也。<sup>(41)</sup>

とある。すなわち因果相召として久遠実成の説示を聞いた以上は尽心求益すべきであるとしているから、ここでの信は久遠実成の説示がなされた以上は、その説示を信じひたすらな道を歩み果を求めると以外に道はないことを示していると思われる。もしもそうだとするならば、ここでの信は *saddha* がふさわしかろうと思われる。

『法花經疏』は、今既に説教を聞くは、これ深般若に服すが故に、那由他劫に五波羅蜜を行ぜざる功徳は一も及ばざる所なり、となして、如来寿量品を聞き得たことは深般若の位であることで最高のものであることを示している。しかし、この箇所は法華經の一念信解の功徳にかかわるところであるから、如来寿量を聞き深般若に服すには、その前提として信と信解 *saddha* と *adhimukti* がなければならぬであろうと思われる。<sup>(42)</sup> このことは、信・信解の両者に相通するものがあり、区別することがむづかしいことを意味するのかもしれないが、「忍謂勝解。此即信因」<sup>(43)</sup>と『唯識論』にはある、信は盲信におち入りやすいためでもあるかもしれない。

如来神力品の註釈の冒頭において『法花經疏』は

明因果既竟。斯則理円事畢。道言德行。備宣□下。然夜光多迥。玄唱逆耳。至於濁末二取信。難得付嘱法花。故先現三諭神力。令衆喜悅。発其奇想。遠使三十方称南無婦命。於後致信。無間然矣。<sup>(44)</sup>

とのべている。法華經が説かれるべき理由は明白ではあるが、夜光多迥、玄唱逆耳であり、更に濁末の世であるために信ぜられることが困難だという時、その信は正法に対するひたすらな心をのべたものであるから、*saddha* が示す信かと思われる。そして、仏の神力 *iddhi* を見て南無釈迦牟尼仏と称えて致信するという時、その時の信もまた仏の偉大さに対するものであるから *saddha* が示す信といふべきであろうと思われる。

竺道生・妙法蓮花經疏における信（望月）

竺道生・妙法蓮花經疏における信(望月)

[註]

- (1) 大正九・一下
- (2) 記統・三九七右下
- (3) 同・同
- (4) 大正九・三下
- (5) 記統・三九八左下
- (6) 大正九・五中下
- (7) 記統・三九九左上
- (8) 同・同 左下
- (9) *Sadharmapuṅḍarīka*, edited by prof. H. Kern and prof. Bunyiu Nanjio. *Bibliotheca Buddhica*, X. (21-  
Sadh. 48-54) 30
- (10) 大正九・六上' *Sadh.* 31
- (11) 記統・四〇〇右下
- (12) 大正九・六下' 六九中' *Sadh.* 37
- (13) 記統・四〇〇左上
- (14) 大正九・七中
- (15) *Sadh.* 43
- (16) 大正九・七上' *Sadh.* 43
- (17) 記統・四〇〇左下
- (18) 大正九・一一中' *Sadh.* 64~65
- (19) 記統・四〇二左上
- (20) *Sadh.* 80
- (21) 大正九・一五上' *Sadh.* 90
- (22) 記統・四〇三右下

- (23) Sādḥ. 30
- (24) 卍統 ・ 四〇三左上
- (25) 同 ・ 四〇四右下
- (26) 同 ・ 四〇五左上
- (27) 拙著『法華經における信の研究序説』二三四〜二三一參証
- (28) 卍統 ・ 四〇五左上
- (29) 同 ・ 四〇八左上
- (30) 大正九・三一中
- (31) Sādḥ. 230
- (32) 卍統 ・ 四〇八右下
- (33) 大正九・三二上
- (34) Sādḥ. 235
- (35) 卍統 ・ 四〇八右下
- (36) 同 ・ 同
- (37) Sādḥ. 240
- (38) 大正九・三二下
- (39) 卍統 ・ 四〇八左上
- (40) 同 ・ 同
- (41) 同 ・ 四一〇左上
- (42) 妙法華經には「聞仏壽命。長遠如長。乃至能生。一念信解。所得功德。無有限量」(大正九・四四下)とのべ、正法華經には「其有聞説如来壽經者。入中受持今別説了。其得福德不可称限。」(大正九・一一六下)とのべ、梵文法華經には「asmīns tatḥagatīyus-pamaṇa-nirdeśa-dharmaparyāye nirḍīṣyamāne satṭvair ekacittōpādīkāy adhimuktir utpādita ʻphīśraddadāhanatā vā kṛtā kīyat te kulaputrā vā kuladhitaro vā puṅgavaṃ prasavantīti |」(Sādḥ. 332) ㄨㄨㄨ。
- (43) 大正三十一・二九中

竺道生・妙法蓮花經疏における信(望月)

竺道生・妙法蓮花經疏における信（望月）

(44) 已統・四一—左上